

その着なしに理由アリ

文 中野香織

第5回



敵将にマンチェスター・ユナイテッドでの業績をたたえられ、「プレミアのゴッドファーザー」と称されたことのある名將サー・アレックス・ファーガソン。一見こわもてのサー・アレックスの、ブートニエルに込めた思いはどんなものだったのか…
© Leo Mason/Corbis

例

えび娘のお受験に付き添い、控え室で胃を痛めながらじっと過ごさねばならないパパの待ち時間。あるいは校了を明日に控えているのに、まだ白いページを残している雑誌編集者の、作家原稿待ち時間。胃や腸が変調をきたすほどの、この種の緊張の時間には、名前がある。スクウイキー・バム・タイム (squeaky-bum time) である。きりきりする絶不調時間、という感じだろうか。名づけたのはサー・アレックス・ファーガソン。イングラントのサッカーチーム、マンチェスター・ユナイテッドの名監督である。監督として極度の緊張に襲われる、リーグ戦の最終ステージをこのように表現したところ流行語になり、05年に堂々、辞書入りした(「コリンズ・イングリッシュ・ディクショナリー」)。

さ

「オレのやり方か、さもなければ道路に行くか (My way, or the high way)」という「スターよりもチーム」のオレ様方式や、反抗的な選手には面と向かって熱風の怒りをぶつける「ヘッドライヤー」ぶりも親しみを込めて語られるため、なにやらカッコしている印象も強いのだが、去る5月19日、新生ウエン

ブリー・スタジアムに、優雅に赤いブートニエルを挿して現れた。

世界が目にするFAカップの決勝戦である。青いユニフォームのチェルシーと対戦する、「赤い悪魔」ことマンチェスター・ユナイテッドの監督はじめスタッフは、試合開始から表彰式まで全員、スーツに赤いブートニエルの正装だった。

チェルシーの勝利に終わったこの決勝戦は、「ファーギーのブートニエル以外は地味だった」と皮肉る人もいたほど盛り上がりに欠けたようだったが、おっと、逆に強引に解釈すれば、ファーガソン監督のブートニエルが、地味なスタジアムに華を与えていたともいえるのではないか? (サッカーファンの皆様、ごめんなさい)

野郎ばかりの、代理戦争のような場でのブートニエル。一瞬、場違い感(この場合は意外な好印象)を覚えただけに、いっそう目を引いた。場違い感は、現代に流通するブートニエルの「意味」に関係する。

現

代において、ブートニエルを挿した男として真っ先に思い浮かぶのは、結婚式の花婿であろう。花婿のブートニエルには、プロポーズの作法に由来する意味がある。男性が女性の前にひざまずき、求婚の言葉とともに花束を捧げる。受け取った女性の返事が「イエス」である場合、その中の花を一本だけ抜き、男性の胸に挿す。だから花婿のブートニエルは花嫁のブーケの花とお揃いである。

ブートニエルは女性からのイエスの印。この伝統の印象が強いため、女がいないフィールドの赤いブートニエルに一瞬戸惑ったわけだが、しかし、ブリーオーニの取締役、ウンベルト・アンジェローニ氏が書くブ

アレックス・ファーガソンのラベルに咲く花は…

ブートニエルの歴史『The Boutonniere: Style in One's Lapel』をひもとけば、女の承諾とはまったく関係のない文脈においても、男たちは積極的にブートニエルを装ったことがわかる。

この本によれば、1830年代あたりから自然崇拜と結びついて、ブートニエルに対する熱狂が一部で本格化し、19世紀の終わりには広く装われるようになり、20世紀の初めにピークを迎えたようである。

ブートニエル全盛期が、男のスーツ「制服」化の時代と重なっているのが興味深い。黒っぽいスーツの胸元に飾られる花は、男が華やかとをけつけて捨てたわけではない、というささやかな抵抗の証しのようにも見えてくる。

だが、アンジェローニ氏は、もつとロマンチックな解釈をする。「ブートニエルの栄光は、そのはかなさにある。摘み取られ、ボタンホールに挿され、あとは枯れるのみ」。

謹厳な顔をしたスーツで武装しつつ、ままならぬことも多い人生のはかなさをさらりと胸元で表現してみせたいのかと思うと、その心意気にぐっとくる。…のもつかの間、枯れてしまうのを少しでも遅れさせるために、フラワーボトルなる、水を入れたガラス瓶の装置(これをリボンで襟穴に固定して花を長持ちさせる)が考案され、人気を博してもいたという。せいせい。

歩

く花瓶」の流行はやはり長続きしなかつたようだが、「精巧に作られたボタンホールは、芸術と自然を結ぶ唯一の窓口である」という19世紀末の劇作家オスカー・ワイルドの言葉は、現在も有効である。高級仕立てスーツの襟穴の裏には、茎を押さえるための小さなループ、「ボ

タンホールガード」がつくのである。そんな極上スーツを着て、金融街シティの男たちは時に赤か白のカーネーションを挿し、チャールズ皇太子はウエールズ訪問に黄色いラッパズイセン(ウエールズの国花)を挿し、エディンバラ公は馬車にまつわる伝統行事で青いヤグルマソウを挿す。

退役軍人は8月1日に「バトル・オブ・メイドン」(250年前の戦争)の勝利を祝って赤や黄色の花を挿して行進し(当時の兵士たちはバラを摘みながら戦場へ向かったという)、ロンドンのロイヤルホスピタルに暮らす元軍人の恩給受給者たちは、ホスピタル創設者のチャールズ2世(17世紀の王様)をたたえてカシの葉を飾る。

つまり、愛情なり決意なり敬意なり誇りなり、なんらかの熱い思いを胸に秘める男たちは、今もあらゆる機会に、あらゆる花や葉を、胸のささやかな象徴としてボタンホールに飾るのである。

ファーガソン監督の赤いブートニエルは、はかなき人生にサッカーというゲームに命を燃やす男の心意気か、はたまた花から勇気を得て戦地に赴く兵士の切ない覚悟に似た軍人の士気か…。さまざまな想像を許しながらスタジアムに華やぎを与える赤い花。その花の香りは監督のスクウイキー・バム・タイムをほんの少し、和らげる働きをしたかもしれませぬ。

Kaori Nakano

服飾史家。人会遇到、話を聞き、そして書くのがライフワーク。UOMOが提唱するエレガンスを、毎回人物を切り口にしてわかりやすくひもときます。「モードの方程式」が男のファッションをめぐる鼎談を収録して新編文庫になりました。